

# CESS 発 環境学習へのアプローチ

## ～地域協働のプラットフォームを考える～

総務・学習・情報担当 立花 幹

### 1 はじめに

埼玉県環境科学国際センター（CESS:Center for Environmental Science in Saitama）は、平成12年4月に旧騎西町（現・加須市）に開設され、今年度で21年目を迎えました。公害問題が解消されつつある中で埼玉県公害センターを発展的に解消し、身近な生活環境から地球環境まで環境に関する総合的な課題解決を推進するという時代の要請に応える形で開設されたのが当センターです。幅広い課題に対処するべく、設立当時、地方環境研究所の主業務であった調査・測定試験研究だけでなく、「試験研究」「環境学習」「国際貢献」「情報発信」の4つの機能（図2）を設定。環境科学の総合的中核機関として、他県にはないユニークなものとなっています。

CESSは、4つの機能を遺憾なく発揮し、20年以上にわたり環境に関する課題解決に尽力してきました。外部研究資金の積極的な獲得、大学などとの共同研究や人的交流、中国・韓国・東南アジア各国などとの人材交流を通じた国際貢献など、特筆すべき活動を行ってきました。今回テーマである「環境学習」については、県民の環境問題への関心の高まりを受けた児童生徒向け環境学習や彩の国環境大学など県民各層へのアプローチなど、多様な活動を積み上げてきました。また、研究所が併設されているからこそ、研究所との一体的運用による学習機会の提供は、CESSの強みを生かした環境学習へのアプローチであるといえます。令和3年12月には、センター利用者数が100万人を達成しました。

年 月	項 目
平成12年 4月	環境科学国際センター開設
6月	早稲田大学理工学総合研究センターと研究交流協定を締結
14年 3月	埼玉大学と連携大学院に関する協定を締結
16年 11月	皇太子殿下（現 天皇陛下）行啓
17年 3月	文科省科学研究費補助金取扱期間の指定
20年 5月	立正大学環境科学研究所と研究交流協定を締結
22年 3月	展示館リニューアル（地球温暖化への対応）
4月	研究所に温暖化対策担当を新設
5月	展示館入場者数50万人突破
25年 4月	環境放射能担当を新設
29年 4月	化学物質担当と環境放射能担当を統合
30年 12月	地域気候変動適応センターを設置
令和2年 7月	展示館リニューアル（大型シアター設置）

図1 CESS沿革

- 環境問題を気軽に楽しく学べる体感型展示
- 環境問題に対する理解を深めるための講座、研修
- 県民への環境学習活動の場の提供
- 身近な生活環境から自然環境までの広い範囲を対象とする総合的、学際的な試験研究
- 大学や民間の研究者との情報交換、研究交流
- 生態園を活用した調査研究



- 海外からの研修生受入れなど環境面での人材育成を通じた国際協力
- 地球環境問題に係る環境モニタリング調査などの国際的技術協力
- 県民のための環境情報の収集・発信
- 国際的な環境情報の収集・発信

図2 CESSの4つの機能

## 2 来館者 100 万人達成

CESS の展示館「彩かんかん」は、平成 12 年 4 月に開館して以来、21 年目の令和 3 年 12 月 10 日に、記念すべき 100 万人目の入館者をお迎えすることができました。当初は 20 年目の節目に 100 万人達成をする見込みでしたが、新型コロナウイルスの感染拡大の影響で臨時休館が続いたことなどから 1 年ほど遅れての達成でした。100 万人達成を迎えた当日は、展示館「彩かんかん」ロビー及び生態園にて記念行事を実施しました。



写真：100 万人目となった入場者との記念撮影



写真：植樹式の様子

来館者が 20 年強で 100 万人達成ということは年間 4~5 万人の来場者ということ。開設以来多くの方に利用していただき、環境問題を考えるきっかけとたくさんの笑顔を提供できていると考えます。20 年前のオープン当初に来館した、当時 10 歳だった少年・少女は、今は「三十にして立つ」の歳を超え、社会の第一線で活躍する人材に育っています。「彩かんかん」は、時代に合わせて様々なリニューアルを行ってきましたが、今も昔も、子供から大人まで気楽に楽しく学べる体感型施設であることが特徴です。手に触れたり体を動かしながら学んでいる子供たちのたくさんの笑顔が、やがて成長の中で地域や社会と環境のかかわりについて理解するきっかけにもつながる。それが 20 年間、「ここに CESS がある」意義であり、地域の中での CESS の役割になっています。地域の中に、環境学習の「場」があり続け、子供たちの成長につながっていることが、地域協働の源泉となっているともいえます。

## 3 CESS の環境学習へのアプローチ

全国の各都道府県に CESS のような地方環境研究所はありますが、CESS の大きな特徴は、「研究部門とが一体的に運営されている」ことです。例えば、研究部門からは研究成果を提供してもらい学習展示の一部として活用したり、児童生徒向け環境学習や彩の国環境大学で研究員が講師となって講座を実施することがあります。学習部門からは、子供たちの様子を研究部門にフィードバックすることや地域のニーズを把握・共有することがあります。何よりも、一体的運営だからこそできる、研究員という「人材」は、環境学習のプラットフォームであり、ほかにはない CESS の特徴になっています。また、CESS 内にある「生態園」（ビオトープ）は研究の実証フィールドであると同時に一般開放もしており、研究フィールドを使った各種体験教室ができることも、講座の魅力度を高めることにつながっています。

研究員が講師となったり、生態園をフィールドとして行っている「彩の国環境大学」は、令和 3 年度までに 1, 895 名の方が修了され、修了後は県内各地域で環境地域の環境学習リーダーや環境保全活動に活躍されています。活躍の一例として、「彩の国環境大学修了生の会」が、自然観察会や食

品ロスの調査等、地域の環境イベントへの出展など地域の活動を牽引してくれています。彩の国環境大学では、修了生に対して年 1 回のフォローアップ講座も実施しており、CESS に帰ってきてもらい、さらに知識やノウハウを高めて、地域の環境保全活動や将来を担う子供たちの環境学習に活かしてもらえるつながりづくりも行っています。



写真：研究員が行った環境学習講座の様子



写真：生態園で行ったの彩の国環境大学講座の様子

#### 4 「情報発信」のこれから

4つの機能のうち「環境学習」のこれからを考える上では、「情報発信」というもう一つの機能を強化していくこともCESSにとっての大きな課題です。埼玉県民の中でもCESSがどこにあるのか、どんな施設かを知らない方は、残念ながら多いと思います。CESSが加須にある、そして「環境学習」として環境に興味を持ってもらうためきっかけを提供していることを知ってもらうことが必要です。

令和2年度のCESSのホームページのアクセス数は約13万件、YoutubeやFacebookなどSNSの閲覧数は約10万件、直接来館される方は約2万人でした。合計すると25万アクセス。CESSを知ってもらうためにこのアクセス数を増やしていく「量」のアプローチと、地域協働につなげていく「質」のアプローチが必要です。

令和2年度は新型コロナウイルス感染拡大のため休館となっていた期間に、YouTubeに「CESSチャンネル」を開設し、リニューアルした大型シアターの紹介動画などの配信をスタートしました。今では、研究員の方からも動画を提供してもらい、「セミの抜け殻の見分け方」「イケメン博士の自由研究講座」など魅力的なコンテンツも増えてきました。

また、Facebookを使った発信では、従来のイベント情報などの発信に加え、センター長が自ら広告塔になりウィットに富んだメッセージを配信する「松ケン主将のほぼ毎日CESS日記」や、CESSの樹木医が悲喜こもごもの体験をつづる「樹木医タケちゃんの生態園日記」を発信しています。両日記とも一読の価値あり、ぜひご覧ください。



YouTube「CESSチャンネル」



CESS公式Facebookページ

地域協働につなげていく「質」のアプローチとしては、地域の小中学校との連携や、展示館来館者との相互コミュニケーションを検討中です。展示館来館者から集めた環境科学に関する質問を研究員がホームページで答える「研究員に聞いてみよう！」のコーナーも間もなく立ち上がる見込みです。CESS と関わりができた県民の皆さんの”その後”を紹介していくなど、地域の活動をバックアップしていくことなども考えられるのではないかと思います。そのような取組を進めることで、「情報発信」が、地域協働のプラットフォームにもなっていきます。

「環境学習のこれから」に向けて、今後も取組を進めていきたいと思えます

## 文献

- 1) 埼玉県環境科学国際センター報 各号（埼玉県環境科学国際センター発行）
- 2) 埼玉県環境科学国際センターニューズレター 各号（埼玉県環境科学国際センター発行）